

〈シナリオ〉

短編舞台シナリオ「探し物」

大石 若 菜

1 短編舞台シナリオ「探し物」

あらすじ

ゴミ捨て場で何かを探す9人の男女。彼らが探しているのは殺された自分自身の死体である。しかし、彼らは思い至る。自分達の中の誰かが、自分達を殺した犯人なのではないかと。

短編舞台シナリオ「探し物」

○ゴミ集積場

ゴミ山の中で、何かを探している青年、越智昭夫（22）。そこに、同じようにゴミを漁る女性、浅野依子（20）がゴミを漁りながらやってくる。お互いの存在に気づき、会釈をする。

越智「どうも」

浅野「こんにちは」

越智「何かお探しですか？」

浅野「ええ。あなたは？」

越智「俺もなんです」

浅野「そうですか。見つかりそうですか？」

越智「それが、全然」

浅野「でしょうね。私もなんです」

越智「何をお探しなんですか？」

浅野「あなたは？」

越智「俺は——」

向こうから、同じようにゴミを漁りながらやってくる女性、香月菜穂（20）。

香月「ないなあ。ないよお」

香月、2人の存在に気づき、会釈をする。2人も会釈を返す。

香月「こんにちは」

越智「こんにちは」

浅野「何かお探しですか」

香月「そうなんですよ。全然見つからなくて」

越智「そうなんですか。俺達もなんです」

浅野「奇遇ですね」

向こうから、5人の女性、伊藤桃子（20）、宇木智子（20）、佐々木真琴（20）、土岐美也子（20）、真鍋法子（20）が、ゴミを漁りながらやってくる。

伊藤「ない、ない——」

宇木「どこー？」

佐々木「参ったなあ」

土岐「こんな所にあるの？」

真鍋「多分、（先客に気づき）あ」

越智、浅野、香月の存在に気づき、会釈をする5人。3人も会釈で返す。

越智「こんにちは」

女性5人「こんにちは」

浅野「皆さん、お友達ですか？」

伊藤「ええ、まあ」

宇木「旅行中で」

浅野「そうなんですか」

越智「賑やかになりましたね」

佐々木「皆さんは？」

越智「俺達は、別に連れてってわけじゃないんですが」

浅野「さっき、会ったばかりなんですよ」

香月「そうそう」

土岐「ここで何をしているんですか？」

越智「ちょっと、探し物をしていて」

香月「そうそう」

真鍋「うちらもなんですよー」

浅野「何を探してるんですか？」

伊藤「私達は」

向こうから、百舌鳥義男（22）が何かを探しながらやってくる。

百舌鳥「（ヒステリックに）ない、ない、ない！」

他全員、百舌鳥の声に驚き、彼を見る。百舌鳥が皆の方を振り向き、気まずそうな顔をする。

越智「（会釈して）どうも」

百舌鳥「（慔然とした態度で）どうも」

浅野、気を使って

浅野「（笑顔） こんにちは。ひょっとして、あなたも探し物ですか？」

百舌鳥「ええ、まあ」

浅野以外の女性陣、百舌鳥を恐がり、少し遠巻きにしている。百舌鳥、他の人達を押しよけるようにして、黙々とゴミを漁り続けている。仲良し5人組が、ひそひそと百舌鳥の悪口を互いに耳打ちしている。

越智「何を探しているんですか？」

百舌鳥「関係ないだろ」

浅野「私達も探し物をしているんですよ。どうでしょう、いっそ、皆で手分けして探したら」

伊藤「いいですねー、それ」

宇木「そうしましょう」

佐々木「(ゴミ山を見回しながら) こんな状況ですもんね」

香月「そうそう」

土岐「手分けすれば見つかるかも」

香月「そうそう」

真鍋「そうしましょう」

香月「そうそう」

百舌鳥「そんなことする必要はない」

香月「そうそう(つつられて言ってしまったが、言った後で、え? という顔で百舌鳥を見る)」

シンとなる一同。

越智「どうしてですか？」

百舌鳥「必要ないからだ」

浅野「でも、あなたも何かを探されてるんですよ？」

百舌鳥「あんたらには関係ないことだ」

互いに顔を見合わせる。

伊藤「(ボソッと呟くように) 人に見られたら困るようなモノでも探してるんですか？」

百舌鳥、伊藤を睨みつける。伊藤、怯えて、隣にいた宇木にしがみつ。土岐、真鍋の袖を引き、端っこに連れて行く。

土岐「(ヒソヒソ) ねえ、(百舌鳥を見ながら) アイツの顔、どっかで見たことない？」

真鍋「ええ? 気のせいじゃない？」

土岐「気のせいかなあ。なんか、どっかで見たことある気がするんだけど」

真鍋、しばらく考え込み

真鍋「あ、私もある！」

土岐「どこで？」

真鍋「交番で——」

土岐「どこの？」

真鍋「ううん、掲示板に彼そっくりの顔写真があったような」

土岐、真鍋、顔を見合わせ、百舌鳥を見つめる。後ろから、伊藤、宇木、佐々木がやってきて

伊藤「何、2人でコソコソしてんの？」

土岐、真鍋、慌てて3人を隅に連れて行き、コソコソと耳打ち。5人娘、ゾツとしたような顔で、百舌鳥を見つめる。

浅野「ま、まあ、無理強いするような事でもないか」

越智「そうですね」

5人娘、激しく頷き、同意する。

宇木「そうですよ！」

佐々木「ええ！ 別々に探しましょう！」

香月「そうそう」

9人、何となく気まずい雰囲気の中、各々、探し物を再開する。

越智「それにしても、参りましたね」

浅野「本当にね」

越智「お名前聞いてもいいですか？」

浅野「浅野と言います」

越智「越智です」

香月「香月で一す」

伊藤「伊藤です」

宇木「宇木です」

佐々木「佐々木です」

土岐「土岐です」

真鍋「真鍋です」

越智「皆さん、学生？」

伊藤「私達は、全員同じ大学です」

5人娘、互いに顔を見合わせ、頷き合う。

香月「私は専門」

浅野「私は旅館の仲居をしています」

越智「俺は大学生」

宇木「ひょっとして、皆さんもあの事件に巻き込まれた人達、ですか？」

5人娘が視線を注ぐ中、越智、浅野、香月が顔を見合わせ、頷く。

佐々木「やっぱり」

土岐「ついてなかったですね、お互い」

真鍋「私達も皆で旅行中に巻き込まれて、そのまま」

伊藤「皆さんは？」

越智「俺は、バイクで一人旅をしていたんですが、泊まり先で」

浅野「私は、仕事に——皆さんが宿泊されている旅館ですね」

香月「え～、本当に？」

宇木「全然気づかなかった」

浅野「今とは雰囲気がいぶ違いますからね。仕事中は着物を着ていますから」

香月「ふーん、なんかすごいなー。私と同年くらいなのに」

佐々木「あなたは？」

香月「私？ 私は傷心旅行中。同棲してる彼氏と大喧嘩しちゃって、無計画で飛び出してきちゃった。

たまたま、泊まり先を見つけられてラッキーって思ってたけど、とんだアンラッキーだよ。あーあ、こんなことなら、喧嘩なんかしなければよかったなあ」

皆、少し、しんみりとする。

越智「でも、これでハッキリしましたね」

浅野「ですね。全員、同じ事件の被害者だとしたら」

伊藤「探し物は、皆、同じか」

宇木「それにしても、あの事件の犯人って」

佐々木「皆、あの時のこと覚えてる？」

土岐「やだ、思い出したくない」

真鍋「それが、よく思い出せないんだよ」

越智「俺も。たぶん、ショックが大きすぎるんだと思う」

浅野「私が覚えているのは、旅館の玄関から聞こえてくる悲鳴と、それから、男の姿。いやにギラギラしてるサバイバルナイフ」

香月「顔は？」

浅野「それが、思い出せないんです。顔だけモヤがかかっているみたい」

5人娘、互いに顔を見合わせる。

伊藤「（声をすぼめて）あの」

5人娘、越智、浅野、香月を囲むようにして、ヒソヒソ囁く。ヒソヒソしている中で、突然、香月が大声をあげる。

香月「マジで！」

全員が慌てて香月の口を抑える。

宇木「（声を低めて）声が大きい！」

全員、恐る恐る百舌鳥の方を見る。黙々とゴミを漁っていた百舌鳥、視線に気づき、8人を睨みつける。

百舌鳥「なんだ？」

越智「いや、別に」

浅野「何でも、ないです」

香月「そうそう」

8人、肩を寄せ合い囁き合う。

越智「でも、あいつが犯人だとしたら、ここには何をしに？」

浅野「そうよ」

佐々木「たぶん、証拠隠滅じゃないかな」

土岐「ありうる」

真鍋「うんうん」

香月「早くここから逃げようよお」

浅野「落ち着いてください。逃げる必要ないじゃないですか」

伊藤「そうよ。だって、私達、もうとっくに」

宇木「でも、なんで犯人まで？」

佐々木「追いつめられて自殺したとか」

土岐「じゃあ、証拠隠滅する必要もないでしょう」

真鍋「それなら、彼は何を探しているの？」

8人、首を傾げる。

百舌鳥「おい、さっきから何をコソコソ話をしている」

8人、ビクツとなる。百舌鳥、8人に近づく。

百舌鳥「言いたい事があるなら、ハッキリ言ったらどうだ、え？」

皆、固まる。浅野だけが意を決したように前に進み出る。

浅野「(にっこりと営業スマイルをして) 何でもございません」

百舌鳥、舌打ち。

百舌鳥「お前らも、ここいらを探すのは無駄骨かもしれないぜ。この辺には何もありません」

百舌鳥、そう言い捨て、舞台からはける。百舌鳥がいなくなった後、浅野が脱力して地面に座り込む。

越智「大丈夫か？」

香月「浅野ちゃん、すごい。度胸あるー」

伊藤「さすが、接客のプロ」

浅野「機嫌の悪いお客様のあしらいは慣れてますから」

宇木「それにしても、あの人、やっぱり」

佐々木「でもさ、さっきの言い方。あれ、自分が犯人だっていう自覚がないんじゃないの？」

土岐「たしかに。なんか他人事みたいな物言いだったような」

真鍋「そんなのどうでもいいんじゃない。自覚があろうとなかろうと」

伊藤「そうだよ、あいつが犯人だってことに変わりはないんだから」

浅野「でも、本当にそうなんですか」

越智「どういう意味？」

浅野「だって、私達、誰も犯人の顔を覚えていないんですよ？」

数秒間、シンと静まる。

伊藤「何が言いたいのか？」

浅野「こんなことは、言いたくないんですけど」

宇木「何よ、言ってよ」

浅野「つまり、可能性があるっていうだけの話ですけど——私達の中に犯人がいる可能性もゼロじゃないですよ」

シンと静まる。皆、何となく笑い始める。

越智「まさか」

佐々木「冗談きつーい」

土岐「真面目な顔で言うんだもん、ビックリしちゃった」

真鍋「ほんとほんと」

浅野「——冗談だと、思います？ ひょっとしたら、自分自身が犯人だっていう可能性もあるんですよ」

越智「いい加減にしてくれ」

伊藤「そんなのあり得ないよ」

浅野「どうしてあり得ないのか？」

伊藤「だって」

宇木「私達、自分達が殺された瞬間のことを覚えているもの」

5人娘、頷き合う。

浅野「でも、その記憶って信用できるのかな」

佐々木「え？」

土岐「どういう意味？」

浅野「だって、私達にはもう脳がないんですよ。それなのに記憶がある。これって、おかしいじゃないですか。私達が記憶だと思い込んでいるものが信用できる保証がどこに？」

8人、シンと静まる。香月、おもむろにゴミ袋を漁り始める。

真鍋「何してるの」

香月「何って、さっきまでと同じよ。探すのよ、私達の死体を」

全員、息をのむ。

香月「それしかないじゃん。確かめる方法。犯人がここに隠した私達の死体を探すのよ。ここに自分の死体がない人間、それが犯人だわ」

全員、無言でゴミを漁り出す。

伊藤「(ぼそっと)でも、私は、やっぱり、さっきの男が犯人だと思うわ」

宇木「私も」

佐々木「私もそう思う」

土岐「でも、もし」

真鍋「やめてよ」

土岐「まだ何も言ってないじゃない」

伊藤「うるさいな、探しなよ」

宇木「そうだよ。要は早く見つければいいんだから」

佐々木、ゴミ袋の中に何かを見つける。

佐々木「あ、あった！ あったよ！」

佐々木、友人達にゴミ袋の中を見せる。中を覗き込む友人達。思わず、目を背ける。佐々木、泣き笑い。

佐々木「ね？」

浅野「あ、私もありました！」

ゴミ袋を覗き込んでいる浅野が声を上げる。残りの方々も、慌ててゴミ袋をひっくり返すように探し回る。

伊藤「あ、私もあった！」

宇木「私も！」

越智「俺も！」

香月「あったー！」

土岐「私も！」

真鍋「あった！」

全員、顔を見合わせる。

伊藤「やっぱり」

宇木「犯人はあの男だわ」

佐々木「分かりきってたけどね」

土岐「私達の中に犯人なんていなかったのよ」

真鍋「よかったー」

百舌鳥「何がよかったんだ？」

後ろから現れた百舌鳥に、全員強ばる。手には大きな黒ゴミ袋。

香月「（逃げながら）出たあ」

浅野「近づかないでください」

百舌鳥「何？」

伊藤「私達、知ってるんだから！」

宇木「そうよそうよ！」

佐々木「あんたが、旅館に押し入って私達を殺した犯人だってこと」

土岐「あんたが隠した私達の死体は、全部、ここにあったんだから！」

真鍋「あんたが私達を殺した！」

百舌鳥、自分の持ってきたゴミ袋の口を、8人の前で広げて見せる。その中を恐る恐る覗き込む越智以外の7人。7人の女性陣、驚いて後ずさる。

浅野「——嘘」

香月「どうして、あんたの死体が」

百舌鳥「お前ら、なんか勘違いしてないか」

百舌鳥、一人だけ皆から離れ、ゴミ袋の口をしっかりと持ったまま、手に持っている越智に目を留める。越智に近づき、越智の持っているゴミ袋を引っ張る。2人の中で引っ張り合いになったゴミ袋は引きちぎられ、中からゴミが散乱する。

百舌鳥「どこにコイツの死体がある」

浅野「まさか——」

伊藤「越智さんが？」

宇木「嘘でしょう？」

全員、越智から離れる。越智、混乱したようにうろたえる。

越智「嘘だよ、こんなの。でたらめだよ。だって、俺がそんなことするように見える？」

浅野に近づく越智。避ける浅野。他の女性陣に近づこうとするが、他の女性陣も怯えて避ける。

越智「なんで逃げるんだよ。犯人はそこにいるその男だろ？ さっきそう言ってたじゃないかよ。そいつ、指名手配されてるんだろ？ 交番で顔写真が張り出されてたんだろ？」

女性陣、百舌鳥からも離れる。

百舌鳥「たしかに、俺は別件で指名手配されてた。でも、殺したのは俺じゃない」

越智「嘘だ！ 全部、そいつのでたらめだ！ 俺じゃない、俺は悪くないんだ」

怯えていた女性陣、越智に対し、次第に怒りをたぎらせてくる。

浅野「——人殺し」

香月「人殺し」

伊藤「よくも私達を」

宇木「返してよ。私達の人生を」

佐々木「人殺し」

土岐「人殺し」

真鍋「人殺し！」

越智に詰め寄る8人。8人に囲まれ苦しみもだえる越智。

越智「やめろー！」

暗転後、明転。舞台上には越智と百舌鳥。女性陣はいない。うずくまったまま、周りを見回す越智と、それを冷たく見やる百舌鳥。

越智「彼女達は？」

百舌鳥「成仏したよ。天国に行ったんだ」

越智「お前は」

百舌鳥「俺はお前と同じ悪党だから、彼女達と一緒にには行けない」

越智、舞台そでにはけようとするが、途中で見えない壁にぶつかってしまう。百舌鳥、それを見ながら

百舌鳥「無駄だよ——そういえば、お前、俺達の死体を捨てた後、このゴミ集積場で自殺したんだってなあ」

越智、百舌鳥を振り返る。

百舌鳥「お前の死体はたぶん見つからないよ。お前は永遠にこのゴミ捨て場で自分の死体を探し続けるんだ」

越智、絶望のあまり絶叫する。

了

あとがき

この作品は、城西国際大学メディア学部の前島良行准教授からのご依頼により制作いたしましたオリジナル脚本です。この作品は、2012年度城西国際大学メディア学部芸能クラス学生発表会にて上演されました。脚本制作の際には、前島先生より以下の条件が提示されました。

- ・登場人物は9人
- ・時間は20分程度
- ・登場人物の台詞量がほぼ均等になること

A short stage scenario 'Search thing'

Wakana Oishi

Abstract

Nine men and women are looking for something in a dumping ground. Actually, the things that they look for is their killed own bodies. However, they started to wonder if there might be the murderer among them.